

2020年度 論文受賞論文および授賞理由

優秀実践フィールドワーク論文賞

橋本栄莉

「難民の実践にみる境界と付き合う方法——ウガンダに暮らす南スーダン難民の相互扶助組織を事例として——」第18号(2019), 76-94.

本論文は、第18号の特集「ゆるやかなネットワークと越境する対話—遊び、学び、創造—」を構成するものである。ウガンダ共和国に暮らす南スーダン共和国からの紛争難民を事例として、難民間の相互扶助組織がいかにして定住区で生じるさまざまな位相の問題を処理しているのかを明らかにする。この組織は問題を解決する一方、「民族」という境界を強化し、他者を排斥する傾向がある。著者はさらに新たな共同体はコミュニティ構築の方法を提示する演劇サークルの実践に注目する。その実践は「民族」もふくめさまざまな境界を曖昧にしながら、難民たちに生きるための知や方法を提示するという。こうした論述をもとにして、本論文では「難民」という状態で、人々がいかにして他者とつきあい、境界とつきあっているのか、その実践や生きる場づくりを描き出すことに成功していると言えよう。

時間をかけた丁寧な人類学的フィールドワークをもとにした質的調査研究が本誌に掲載されることはあまり記憶がなく、着目に値する。ただ状況説明など本論に入る前段の説明に紙幅を割きすぎた印象がある。そこを工夫していれば、後半の分析をもう少し余裕をもって展開できたのではないだろうか。ただそうした思いも本論文がもつ面白さから出てくるものだ。難民が生きる場でどのように問題と向き合い、問題とつきあっているのかという「実践的」課題を描き出す、優れた「実践フィールドワーク」論文として、高く評価したい。

優秀創生フィールドワーク論文賞

岡部大介・大谷紀子

「アーティストと人工知能技術の協働作曲にみる創造と省察」第18号(2019), 61-75.

本論文は、第18号特集「ゆるやかなネットワークと越境する対話—遊び、学び、創造—」の一編として、作曲という芸術活動と、人工知能という情報技術とを、文字通り結びつけた取り組みである。創造性は心理学にとって重要な研究テーマであり続けてきたものの、アーティストの活動は門外漢には敷居が高

い。一方、AIという言葉や技術はすっかりわれわれの身近になったが、質的心理学にとっては縁遠い研究領域と見なされがちである。筆者たちによる、この両者を組み合わせ、探求と協働の新たなフィールドを生み出した越境の試みが、学会賞選考委員会では高く評価された。『質的心理学研究』に、おそらくは初めて楽譜が掲載されたことにも象徴されるように、本論文は、質的研究の新しい実践と表現の可能性を示すことに成功している。アーティストにただ目新しい機会を提供したにとどまらず、その作曲プロセスを観察し、インタビューを重ね、創作活動に対する省察をともに深めた点に、本研究最大の特色がある。欲を言えば、作曲場面やAIとの対話についてはさらに緻密な観察を期待したいところであるし、AIが介在しない活動との根本的な相違についても検討が必要となるであろう。しかし、このような問いを喚起し、質的心理学にさらなる探求と実践の可能性を示したことを、まずもって評価したい。芸術も科学技術も、人の織りなす創造的な活動であり、それはフィールドワークにとっての欠かせない対象であることを、本論文は再認識させてくれたといえる。

優秀変革期フィールドワーク論文賞

小林恵子 「後ろ向きの越境と境界の変容に関する研究——危機に直面した企業組織でのフィールドワークから見えてきたもの」第18号（2019）, 41-60.

経営危機に直面し外資企業に買収され、その傘下に入った再建中の老舗企業において、一部の社員が業績の芳しくない事業部から、一時的に組織された販売活動チームに集められ、未経験の販売強化活動に従事する——本論文はそのチームの活動と、活動の支援者たちによる実践に焦点をあて、「越境」の諸相についてエスノグラフィーとして描いた第18号特集論文である。チームのメンバーは販売促進イベントや戸別の訪問販売など昔ながらの活動に従事するが、その成果は労力に比して低調である。筆者は支援者の立場を得てフィールドに関わり、変革期に一時的なポジションに置かれた人たちの戸惑いや葛藤、動機などを丁寧にすくい取っている。

誠に誰もが「汗を流した」論文である。会社の変革期に将来展望よりも今どうするかということに悩みつつ慣れない販促に従事する研究協力者も汗を流し、貴重なフィールドで、時に煙たがられながら、チームのメンバーの多様な声をすくい取ろうとする筆者も汗をかいている。戸別訪問販売の場面で、かつて自分が開発に携わった製品を筆者に解説する場面に、苦境に立つ会社の現実が映し出される。このような調査が実現したことが意義深く、メンバーの、一様ではなく揺れ動く「生」を描き出そうとする姿勢に、「研究すること」の重さや原点を読み手に喚起させる論文である。

議論の可能性は、上記の実践における越境について、「後ろ向き」とするところにあるだろう。筆者はこの越境について、見え隠れしたり、自他双方が創り出したり、浮遊したりするなど、複雑で多様な在りようを論じている。メンバーが「あちらが本当の居場所」だが「戻れないかもしれない」と境界自体を可視化させるかどうか、葛藤する様子も描かれる。意図せずあるいは不本意に販促活動に関わるこ

とが「後ろ向き」なのだとしたら、調査時から3年ほど経ち、企業も立ち直りつつある現在、彼らにとっての「境界」とはいかなるものに変化しただろうか。興味がつきない。